

海外調査研究	
タイトル：ワラビスタン（埼玉県蕨市・川口市）と北クルディスタン（トルコ南東部）におけるクルド人の社会・空間構造の比較調査	
氏名 三浦 尚子	所属 グローバルリーダーシップ研究所
期間	2022 年 9 月 7 日から 9 月 14 日
場所	トルコ南東部（Kahramanmaraş 県 Mahkanlı 村・Ağcaşar、Adıyaman 県 Kâhta、Gölbaşı）

1. 海外調査研究の必要性と目的

近年、ロシアによるウクライナ侵攻の影響を受けて、「難民鎖国」と揶揄されてきた日本においても、難民庇護を申請する者や彼／彼女らの故郷となる地域への関心が高まっている。時代の潮流に乗って、日本政府や法務省管轄の出入国在留管理庁（以下、入管と記す）はウクライナから逃れてきた者を「避難民」と称して受け入れる体制を整えたり、アフガニスタンで日本大使館に勤務していた者とその家族を難民として一括で認定したりしている。ただし、特定の国に限定された難民施策は、これまでに難民申請を複数回行ったものの、不認定となって在留資格を喪失したほかの民族に不平等感を呼び起こしている。その代表として、「国をもたない最大民族」と称され、祖国での迫害や差別から逃れてきたクルド人をめぐる処遇が挙げられよう。

1990 年代以降に移入してきた在日クルド人は、主に埼玉県川口市・蕨市に家族・親戚を呼び寄せて定住し、2022 年現在 2,000 人以上のコミュニティを形成している。彼・彼女らの故郷は、「クルドの土地」を意味するクルディスタンと言われており、その呼称にちなんで、在日クルド人が暮らす当該の地域は「ワラビスタン」と呼ばれている¹⁾。ワラビスタンに暮らす在日クルド人の出身地は、北クルディスタンにあたるトルコ南東部に集中している。トルコ南東部に暮らすクルド人の村は、トルコ建国以降政府の圧力のもと軍事的な脅威に晒されてきたが、1980 年代以降、急進的なクルディスタン労働者党（Kurdish Workers Party, 以下 PKK と記す）が有力な武装組織としてゲリラ活動を展開したことで、さらに熾烈な紛争を経験することとなった（Yildiz 2005）。トルコ政府は 1985 年に「村の守護者」制度を創設して、産業が未発展なクルドの村に、PKK の対抗勢力となるよう安定した収入と武器とを提供した一方、PKK も強硬な姿勢でトルコ政府の対反乱政策に対応した（今井・岡野 2022）。トルコ政府か PKK か、どちらを支持するかは村の存続にかかわるもので、在日クルド人の第一世代は「トルコ国軍の兵士となってクルド人と戦うか、ゲリラとなってトルコ軍と戦うか、それともトルコから逃れるか」という選択肢の中で、難民庇護を求めて来日した。現在でも在日クルド人の多くが日本の入管に難民認定の申請をしているが、その中には、すでに難民不認定の判定を受けて「仮放免」の状態生活する者が含まれる。

仮放免とは、在留資格が認められないまま入管収容所の「外」に被収容者が一時的に解放された制度のことを指す。同制度には、たとえ当事者が地域で生活できたとしても、就労できない、住民登録ができない、仮放免先の住所がある都道府県から越境できない、と 3 つの「できない」が定められている。

そのため、当事者は経済的、社会的、政治的に不安定な状況で生活せざるを得ず、将来の見通しも立たないため精神的な不調を訴える場合も少なくない。加えて、もともと羊飼いを生業とするクルド人は牧草地を巡る部族間の闘争が絶えず、部族ごとに形成された集落の「内 in-」の強い結束と集落「外 ex-」への希薄な社会構造をもつ（ベシクチ 1994）。民族としての統一意識に欠け、自らのアイデンティティが親族に帰属するクルド人の社会構造はワラビスタンでも受け継がれており、荒川沿いの沖積低地でアナトリアの山岳地帯のような土地の高低差はほばないものの、部族ごとの小集落が点在している。さらに、女性の結婚適齢期はワラビスタンにおいても 10 歳代後半であり、女性は家庭という非常に局所的な空間に留め置かれる傾向にある。それは、東京都に隣接する都市空間に閉鎖性の高いクルド村落が存在することを示唆している。当該の地域では、地元住民や関係者らと互いの文化的な差異を認め合う機会を十分に得られないまま数十年が経過しており、医療、教育、住まい、社会参加など生活に直結する場面でトラブルが多発している現況にある。

そこで、こうしたコンフリクトを少しでも解消していくためには、まず部族の伝統文化を重視する在日クルド人コミュニティのメンバーの価値観を理解し尊重した上で、アプローチしていく方法論を提示する必要があると考える。本研究は、在日クルド人の主な出身地である北クルディスタン（トルコ南東部）において、自然環境や村民の生活状況を報告者の一次資料として調査し、ワラビスタンの社会・空間構造と比較することで、クルド文化への理解を深めることを目的とする。得られた知見は、日本で「誰一人取り残さない」包括的な地域ケア・システム構築への一ステップとしたい。

ところで、「多文化共生の実現」という標語が地方自治体でも積極的に謳われるようになる以前から、日系ブラジル人や日系ペルー人などを対象に、移入してきた子どもの不就学の課題やその解消に向けたアプローチは宮島・太田編（2005）ら社会学や教育学の分野で提示されてきた。一方、グローバル・スタンダードとはかけ離れた日本の入管行政に対する批判は、高谷（2019）ら社会学や人類学の分野のほかに、弁護士など法学の専門家や人権団体、ジャーナリストらからも多く寄せられている。ただし、在留資格を持たない外国人の場合、住民登録ができないため地元の行政担当者から「対象外」と位置づけられやすく、具体的な生活支援の枠組みが一般化されていない。定住性の高いビザを持たないと、国籍国や常居所のあった地域へ帰還する可能性があるともみなされる場合もあるからである。ただし、日本で生き抜こうとするクルド人は、当事者が切実に訴える「故郷に帰りたくても帰れない」難民性のみならず、ある特定の地域で日本の制度や文化と重なり合いながらも独自の生活様式を維持しながら生活する移民としての特性も持ち合わせている。そこで、報告者は障がい福祉分野で重視される「生活者」という概念を援用してみたい。大規模な収容施設の「外」にあたる地域コミュニティにおいても、在留資格の有無よりもまずは人間として当たり前の生活保障、すなわち人権保障を前提にした支援体制が求められると考えるからである。

2. 目的がどのように達成されたか

2-1. プレ調査

まず、海外調査の目的を達成するためのプレ調査の過程から記述しようと思う。

報告者は、地元である蕨市の支援団体「在日クルド人と共に」と、茨城県にある東日本入国管理セン

ターで面会活動を定期的実施する「牛久入管収容所問題を考える会」のメンバーの協力を得て、2021年5月から現在まで断続的にクルド人の家庭訪問や日本語教育を実施し、当事者との関係作りに努めてきた。難民庇護を求める者の特徴として、出自がわからないよそ者に対する警戒心が強いことが指摘される。本調査においても、家庭訪問当初、出身地はトルコ南東部の「ガジアンテップ Gaziantep」という都市名のみが伝えられていたが、訪問回数が増え、1年を超えて顔を合わせるようになると、徐々にガジアンテップ以外にカフラマンマラシュ Kahramanmaraş、アデゥヤマン Adıyaman、シャンルウルファ Şanlıurfa といった別の地域名が挙がるようになり、さらにその近郊の村や町といった小規模な地理的スケールの名前が挙がるようになっていった。

今回の調査にあたり、クルド人コミュニティと20年以上にわたり交流がある牛久入管収容所問題を考える会代表の田中喜美子氏を通じて、1990年代に日本に訪問し、現在6回目の難民申請中であるA氏の御助力を賜った。A氏の出身地であり、クルドの村として複数の集落をもつカフラマンマラシュ県 Mahkanlı²⁾村でフィールドワークすることが決定した。しかし、連絡を取り合う過程で、クルド人の約7割が現在も牧畜業に従事しており、報告者の訪問時期には移牧 transhumance 先の高原 yayla におり、同村には羊飼いを引退した高齢者のみが生活していることがわかった。そこで、報告者は高原への訪問を依頼したところ、現地での調整に時間を要したものの、同県の Ağcaşar³⁾という地域での滞在が可能となった。

調査には、A氏の親戚にあたるB氏と、同国はイスラーム教圏であるため、ジェンダーへの配慮からB氏の母親も同行することになった。外出時、日中でも報告者がトイレに一人で行くことは一度もなく、常にこの二人から安全面での多大な配慮を賜った。

2-2. 本調査

次に、目的がどのように達成されたか、①水不足の村と羊飼いのクルド人、②村民の生活、③日本、そしてトルコに対する思いという視点から、北クルディスタンとワラビスタンと比較しながら詳述していく。

2-2-1. 水不足の村と羊飼いのクルド人

トルコ南東部の夏は気温の日較差が大きく、特に今年は降水が少ないため日中は特に強い日差しと乾燥に晒された。どれほど乾燥しているかというと、報告者の唇の皮が何度もめくれ、リップクリームが何の役にも立たなかったくらいだ。まず、この著しい乾燥が湿気の多い日本の夏とは異なっている。ワラビスタンではこの湿気に適応できない家庭が少なからず存在している。彼・彼女らの生活様式が湿潤な日本の、しかも室内が湿気のこもりやすい環境に適していない場合には、子どもたちの皮膚疾患などにつながることも多い。

さて、到着した Mahkanlı という村の名前はクルド語で、地図上ではトルコ語の Hürriyet が使用されている。訪問した集落では鮮やかな青空のもとで、ゴロゴロといたるところにある石、ゴツゴツの岩、パラパラの砂、そしてチラチラと目に入る灌木と、乾燥帯独特の景観が広がっていた（図1）。アナトリア高原はユーフラテス川やチグリス川の源流を有しており、クルディスタンが位置する地域は基本的に水資源が豊富であると紹介されている（中川 2001；クナツプほか 2020）。しかし、本調査で訪れた村は

水資源に乏しく、この時期に牧羊用の草が育たない。そのため、村民は毎年約4か月間の移牧を余儀なくされている。移牧先は、行政に自分たちが支払える価格を申請したのちに振り分けられるため、毎年訪問する場所が変わってくるそうだ。現在はトルコ全体で道路が整備され、移牧先まで数百頭の羊やヤギを自動車で移動させることが可能になったが、それ以前は徒歩しか手段がなく、高原まで片道2か月近く時間を要したこともあったという。移牧先には子どもたちも連れていくことから、誰もが等しく享受できるはずの学校教育を受ける権利が、1年を通じて村民たちには保障されてこなかった過去が推察される。

調査期間中、水脈を辿るように同村以北・以東にあたる山岳地帯に点在するほかの集落を巡ったが、緑＝水が豊富にあるところに近接するところもあった。言い換えれば、先述した村は羊飼いの集落にもかかわらず、水をもたない土地が割り当てられているということである。これは、在日クルド人の主な出身地がトルコ国内で経済的にも社会的にも虐げられていた地域に属することを表象している。

ちなみに、クルド人が育てる羊は食用として国内外を問わず支持されているということだが、物価高騰のあおりを受け、国内よりもサウジアラビアやイギリスなどの海外で需要が高まっているという。上記の水のみならず、個別でみると羊をもてない羊飼いや、一時的に牧羊を中断していた。

2-2-2. 村民の生活

さて、プレ調査で聞き取っていた通り、入村した集落では家を守るために1名か2名の高齢者と若干の若者が残っている程度で、平時300人程度が居住するということを考えると、ひっそりとしていた。それでも同村の親戚の紹介で訪問した報告者を迎え入れようと、村民はすぐ寄り集まって歓談が始まった（図2）。この寄せ集まって四方山話に興ずるさまは、ワラビスタンの家屋の前でもよく見かける光景である。村内の家屋は概ねコンクリートで建てられており、家屋に隣接して敷地内に空の羊小屋があった（図3）。B氏の弟の家屋は費用ができれば建てるという風に、ゆっくり進められていた。

さて、報告者の訪問時期が移牧の終盤に入っていたこともあり、Ağcaşarは高原といえどもすでに牧草が少なく、石や砂が目立っていた（図4）。午後3時ころになると、羊飼いが先導して羊やヤギが水飲み場を目指して下りてきた。羊は綺麗に掃除された水を飲むと（図5）、搾乳の順番を待つあいだ列をなして、首を垂れて前の羊の尻に隠すようにして涼みながら瞬時に寝入った（図6）。搾乳の盛んな時期は終わっていたため、搾乳を希望する羊とそうではない羊がおり、後者は自ら搾乳のほうの列には並ばないという。これまで羊の群れの近くにいたこともなく、まして羊の「スースー」という寝息を聞いたこともなかった報告者は、気持ちが高揚していた。そこに、訪日経験があり日本語を覚えている、概ね40歳代以上の羊飼いたちが次々と声をかけた。彼らは羊にはいかに水が必要であるか、いかに暑さが天敵であるか、丁寧に説明した。羊飼いという仕事への誇りが垣間見えた場面であった。

食文化は、同村でもワラビスタンでも大きな違いはない印象を受けた。食べ方は椅子を使わず、カーペットを敷いて、膝を突き合わせる。主食はパンで、朝食と昼食にはヨーグルトやチーズ、またヨーグルトとチーズのあいだくらいの乳製品のほか、トマトやキュウリなどが食卓に上る（図7）。おもてなし料理として、ラードで炒めた麦や米に羊肉やヤギ肉をのせたピラフを食べる（図8）。食事中に用意される飲料はアイランといってヨーグルトに水を入れて攪拌したもので、食後は砂糖をたっぷり入れた紅茶で締める。女性は昼夜を問わず、場所を問わず、家事労働に従事している（図9）。

嗜好品としては、アデウヤマン産でフィルターなしの紙巻タバコが特に好まれており、男性の談笑の場面でもよく登場していた。

2-2-3. 日本、そしてトルコに対する思い

「どうして日本に行くのですか」という報告者の質問は、村民たちにとってはなぜそのような質問をするのかと失笑に値するほど、来日はその地域では当たり前のことであった。在日クルド人第一世代の来訪時期にあたる 1990 年代、「日本に着いたらワラビのマックに行け！」（鴫沢 2019）と当該の地域では言われていたようだ。実際のところ、A 氏によれば、蕨駅周辺のマクドナルドに行けば、先住するイラン人が当面の住まいと仕事を世話してくれたという。言い換えれば、約 30 年前には、「ワラビ」という地名がクルド人の集落で飛び交っていたということになる。移牧先の草原でこれほど日本語が使えることもないであろうというくらい、来日経験があるクルド人の多さに報告者は目を見張った。来日経験のない 10 歳代の男性も、スマートフォンのアプリでトルコ語と日本語の用語集を見せて勉強している様子を教えてくれて、日本への親しみを知ることが出来た。一方で、彼が「トルコはどうか」と報告者に質問した際、「良いですよ、好きです」と返答すると「自分はそういう風には思えないけれども」と即答したやり取りを通して、トルコに対する心理的な隔たりがあることも推察された。

さらに、一山超えたテントで、日本へ再訪を心待ちにする兄妹に出会うことができた。20 歳代の兄は、テントの裏にそびえたつ乾いた山を見上げながら、「トルコでは羊飼いをするしかないから、ここにいるだけだ。ここには希望がない。日本に行けば、日本には希望があるんだ」と、日本の難民認定や長期収容などの入管行政の制度を知っているにもかかわらず、言い放った。

また小学校低学年の時期に日本で通学していた妹は、いまは日本で中学 2 年生相当の「8 年生」で、義務教育が終わる年齢に達していた。彼女は目を輝かせながら次年度は「リセ」に通いたいんだと教えてくれたが、それを聞いた年長の姉は鼻であしらう素振りを見せた。当該のコミュニティでは、女性が義務教育後に親戚との結婚の準備期に入る場合があり、高原も見合いの場所の一つである。ワラビスタンでは、在留資格を得るために日本語を含む学業に専念し、高等教育を受けた上で在留資格獲得のための裁判を起こす子どもたちがいるが、それは手に職をつけ、早期の結婚を避けるためでもある。クルドの子どもたちがコミュニティ内のジェンダーの規範から解放されるための唯一の手段ともいえる。言い換えれば、帰郷した村落では、教育、結婚、仕事に対して、子どもたちにとって伝統文化とは異なる選択肢を得ることは、さらに難しい状況であることが理解された。

2-3. 調査後

帰国後、本調査で撮影した故郷の景観写真を眺めたクルド人の中に、感無量の面持ちで「Mahkanli…」と何度もつぶやく女性がいた。40 歳代の彼女は主にクルド語を使い、いつもは日本語ができる夫や息子の後ろにいて居間に通された日本人と積極的に関わろうとしないが、このときだけは報告者のスマートフォンを持って写真をめくるために前に出てきて郷愁の念を示したのである。広大な土地、乾いた空気、曇り一つなく澄み渡る空、そして日差しが降りそそぐ明るい居室、子どもを村全体で育てようとする姿勢など、故郷の物理的・社会的な環境は、湿気過多の気候、猫の額ほどの広さで日差しがあまり届かない借家、子どもが騒げばすぐ通報される近隣住民との関係など、日本のそれとは真逆である。

加えて、2021 年以降、報告者が関わってきた 4 家族が難民不認定で仮放免となった。中学 1 年生のと

きに「社会科の先生になりたい」と将来の夢を語った子どもに、笑顔が消え始めたのはその時期である。仮放免という状況は子どもの心身の不調にもつながっている。これは、報告者が出会ったクルド人は、トルコ南東部の北クルディスタンとワラビスタンという限られた居住地域の中で、生きるうえでの希望が収奪されていることを意味する。まさに、ロサンゼルス学派で都市社会地理学者のウォルパートやディア、ウォルチらが、精神疾患を抱えた入院患者が病院の外に解放されたとしても「壁のないアサイラム asylum without walls」に集住して生きざるを得ないと指摘した現象と酷似している（Wolpert et al 1975 ; Dear and Wolch 1987）。仮放免者が多く住むワラビスタンには、入管収容所から一時的に身体が解放されていたとしても、「生活者」として生きていくために必要な就労権、住民として享受できる権利、移動権を奪われた者が「閉じ込められた」空間が存在している。さらに、家父長制のもとで、10歳代半ばで親戚と結婚して家事労働に従事し、クルド語を主に使用する女性は、「閉じ込められた」空間のさらに狭い家庭空間に「閉じ込められ」、クルド文化継承の担い手という主体性を引き受けざるを得ない状況にあるといえよう。

本海外調査は、北クルディスタンとワラビスタンという、2つの地域を交差させながらクルド人の文化・社会を理解する足がかりとなった。欧米列強が国民国家の線引きをする以前から、独自の生活様式を守って居住していたクルド人の地理空間は、故郷であるクルディスタンを超えて、ワラビスタンにおいても再生産されており、まさにトランスナショナルな現象が起きているといえる。

今後はさらに議論を精緻化して論文、ひいては後述する拙著を完成させて社会に貢献したい。

今後の課題として、移牧の時期以外に訪問することが必要となることが挙げられる。村民悲願の学校が集落に建設されているので、同施設を見学して子どもたちの暮らしぶりや教育制度を確認したい。加えて、報告者を見て「嘘をつきそうにない眼をしている」と言いつつも、フィールドノートを見せながら記述するよう求めた村民もいた。今後このテーマに取り組む上で当事者とさらに丁寧な関係を築くためにも、時期をあけずに再訪する必要があるといえる。

3. 本学での研究の中で本若手研究支者支援がどのような位置を占めるのか

報告者は現在『施設・制度の地理学 *Geographies of Institutions*』というタイトルで拙著を構想中である。報告者はこれまで、2022年現在でも OECD 内の精神病床数で 37.6%を占める日本の隔離収容型の精神医療によって、施設・制度の「外 ex」に物理的にも社会的にも出られなくなった精神障がい者が地域生活へと移行する過程を研究テーマに取り組んできた（三浦 2013;2016;2021）。日本では、欧米圏で着手された精神医療改革が 50 年経ったいまでも起きずにおり、大規模な収容施設が被収容者の文化を容易に剥奪することへの批判はあるものの（古屋 2015）、具体的な施設・制度の解体には至っていない。精神科病院で長期在院する者は、「生活者」ではなく「患者」という主体性で日常と非日常が逆転した特殊な空間の中で生きている。アメリカの社会学者ゴッフマン（1984）が、すでに 1950 年代の調査で施設の隅々まで制度が張り巡らされた「アサイラム」という空間の暴力性を批判しているものの、日本の精神医療は入管行政と同様にグローバル・スタンダードから外れていても気にならないでいる。大規模な施設に被収容者を長期的に隔離して一般社会からその身体を不可視化させることで、喫緊に取り組むべき課題を先送りしてきたやり方は、精神医療でも、入管行政でも変わらないということである。

長引く感染症禍への懸念でフィールドワークへのハードルが高まる中、海外調査へのサポートを含む本若手研究者支援は、報告者にとって心強いものであった。本調査期間中においても当事者の日常世界、特に海外で難民性の高いコミュニティの、さらにプライベートな家庭空間に「入り込んで」調査を続けることは、ときに報告者の気力と体力の極限が試されている感覚に襲われた。その中で、「国際的な女性リーダーの育成に関わる海外調査研究」の一環で母校に「背中を押してもらっている」という安心感をもって調査に臨むことは何にも代えがたいものであった。改めて感謝の意を示す。

4. 発表・投稿先

今後の研究の公表先を以下に記す。

4-1. 発表

まず、2022年10月15日に京都で明治大学の荒又美陽氏代表の「移民・マイノリティの地理学研究会」が開催されるので、「多文化共生の理想と現実―難民庇護申請者の「内 in-」と「外 ex-」の日常空間に注目して」という題目で発表し、ディスカッサントらと意見交換した。続いて、2022年12月には「牛久入管収容所問題を考える会」の総会でワラビスタンの子どもたちの就学問題や医療問題について当事者と共に発表する。2023年4月には、大阪公立大学にて IGU Thematic conference in Osaka が開催されるので、国際学会で、本海外調査で得られた知見を含めて発表したい。さらに先になるが、今年度に引き続き、2023年9月に日本精神保健福祉士協会学術集会の分科会「多文化・多様性・孤立支援」で発表する予定である。

4-2. 投稿

ワラビスタンでの研究内容はすでに 2022 年 3 月の日本地理学会春季学術大会および 2022 年 9 月の日本精神保健福祉士協会の学術集会で公表しているので、議論をさらに精緻化した上で人文地理学会の学術誌『人文地理』に投稿する予定である。学校・教育制度の調査で公表すべき研究内容にまで深められたときに、拙著『施設・制度の地理学』を刊行する予定である。

注

- 1) ワラビスタンという名称は、自称というよりも他称である。
- 2) A 氏によると「マフカンル」と発音する。
- 3) A 氏によると「アグジャサル」と発音する。

参考文献

- 今井宏平・岡野英之(2022) クルディスタン労働者党(PKK)のリクルート方法―なぜ人材を確保し続けてこられたのか. 今井宏平編著『クルド問題―非国家主体の可能性と限界』83-109. 岩波書店.
- クナップ, M.・フラッハ, A.・アイボーア, E. 著, 山梨 彰訳(2020)『女たちの中東 ロジャヴァの革命―民主的自治とジェンダーの平等』青土社.
- ゴッフマン, E. 著, 石黒 毅訳(1984)『アサイラム―施設被収容者の日常世界』誠信書房.
- 高谷 幸編著(2019)『移民政策とは何か―日本の現実から考える』人文書院.

- 鵜沢哲雄（2019）『日本で生きるクルド人』ぶなのもり.
- 中川喜与志（2001）『クルド人とクルディスタン—拒絶される民族』南方新社.
- 古屋龍太（2015）『精神科病院脱施設化論—長期在院者の歴史と現況、地域移行支援の理念と課題』批評社.
- ベシクチ, İ. 著, 中川喜与志・高田郁子編訳（1994）『クルディスタン=多国間植民地』柘植書房.
- 三浦尚子（2013）「障害者自立支援法への抵抗戦略—東京都 U 区の精神障害者旧共同作業所を事例として」『地理学評論』86, 65-77.
- 三浦尚子（2016）「精神障害者の地域ケアにおける通過型グループホームの役割—「ケア空間」の形成に着目して」『人文地理』68, 1-21.
- 三浦尚子（2021）「東京都における精神科病院長期在院者の「地域移行」の特性と課題—M. セールのエクスティテューション概念を援用して」『地理学評論』94, 234-249.
- 宮島 喬・太田晴雄編著（2005）『外国人の子どもと日本の教育—不就学問題と多文化共生の課題』東京大学出版会.
- Dear, M. and Wolch, J. (1987) *Landscapes of despair: From deinstitutionalization to homeless*. Princeton: Princeton university press.
- Yildiz, Kerim. (2005) *The Kurds in Turkey*, London: Pluto Press.
- Wolpert J., Dear M. and Crawford, R. (1975) Satellite mental health facilities. *Annals of the Association of American Geographers* 65, 24-35.

みうら なおこ／お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所特別研究員

【受け入れ教員のコメント】

三浦尚子さんは、学位論文で精神科病院の社会-地理的な意味、特に隔離の問題を扱い、今回の研究テーマでは、対象を難民として日本にやってきた人々の集住地を扱っています。埼玉県蔵市に集住するクルド人のフィールドワークを行ううちに、彼らのもともと居住していたクルディスタンの生活様式を調査するのが動機となっています。社会制度 institution には、かならず地理的な意味での物的施設 institution が構造化されており、この社会-地理的な結びつきをフィールドワークによって明らかにするこの研究は来るべき著書の一つの章となる内容をもったものとして評価します。

（人間科学系・教授・水野勲）

A Comparative Study of the Social and Spatial Structure of the Kurdish People in Warabistan (Warabi and Kawaguchi Cities, Saitama Prefecture) and North Kurdistan (Southeastern Turkey)

Naoko Miura

This study was conducted for comparison of the socio-spatial structure of "Warabistan," a residential area for Kurds living in Japan extending from Warabi City to Kawaguchi City in Saitama Prefecture, with the Kurds' original residential area of southeastern Turkey (North

Kurdistan). Results are expected to elucidate the traditional culture of the Kurds, who have prominent refugee and migrant characteristics, and who develop livelihood support for residents who might lose their residency status in the future. Results of this study are intended to provide a foothold for the development of livelihood support for the Kurdish people, including those who have lost their residency status. Despite the markedly different physical environments of wet and dry climates, and alluvial lowlands and mountainous terrain, the homeland lifestyle of the Warabistan people remains as reflected by their tribal settlement, strong tribal unity, strong caution about strangers with ambiguous origins, gender norms, etc. However, intersections of different institutions and cultures have occurred. Many young people were particularly troubled when they interacted with different institutions and cultures. On a macrospatial scale, findings demonstrated that transnational spatial structures beyond the hometown also exist. On the local spatial scale, "confined" spaces existed in both regions in which it was difficult to escape from the community in question.



図1 訪問した村



図2 歓談する様子



図3 村内の家屋と羊小屋



図4 移牧先の高原



図5 水を飲む羊



図6 搾乳を待つ羊



図7 朝食



図8 仔羊肉のピラフ



図9a 移牧先のテントで夜の歓談



図9b 歓談時に食べるデザートを準備する若い女性